

助成活動実績報告書

企画名	第17回 あかいわエコメッセ
団体名	あかいわエコメッセ

①活動の目的について

岡山県が原発からでる高レベル放射性廃棄物の地層処分の候補地になっていることに不安を感じる市民たちが、1990年に処分場を作らせないための県条例を求める運動を起こしました。条例制定は実現できませんでしたが、当時の県知事の「県民に不安を与えるものは持ち込まない」という答弁を引き出すことができ、現在に至っています。

あかいわエコメッセは、この運動に係わった人たちが中心になり、1997年の「チェルノブイリの写真展」を皮切りに、毎年夏休みに親子向けの企画として「あかいわエコメッセ」を開催しています。また、放射能のゴミ問題にとどまらず、身の回りの様々な環境問題について勉強会、情報交換会などを行っています。

また中学生の夏ボラの参加が継続的にあり、スタッフとして展示の説明や、ワークショップのお手伝いなど多様な体験をすることで、環境問題へのきっかけづくりに役立ててもらっている。

②内容について

東京から岡山へ移住された開業医の三田茂先生の講演会

「東京から岡山へ移住下開業医の危機感」と題して、東京で診療してきた経験から、東北地方にとどまらず、関東、東京地域も高濃度汚染地域が散在していること。そして子どもだけでなく、子育て中の親たちにも異常な症状が多く出ている事実を語られました。岡山でも農産魚介類は産地を気にして選ぶこと、原発からの放射能は冷却されていてもメルトダウンした高濃度放射能は管理できていない状態であり、放射能汚染水は結局貯水できず海へ放流していること、避難者はまだ6~7万人が全国各地におり、生活不安、経済的困窮、家族離散など中には離婚にいたった家族も多くいます。

西日本初の写真展として「放射線像—放射能を可視化する」加賀谷雅道さんによる写真パネル展が多くの人たちの関心と驚きで好評でした。印象深いのは、汚染地域の保育園のスリッパと園児の上履きが放射線の反応で真っ黒に映し出されていました。キャプションには「写真週の中で一番胸を打たれた1枚です」とありました。

例年写真展をしている広河隆一さんの作品は「放射能に襲われる子どものいのち」をテーマに、世界各地の紛争地域で武器として使用されている劣化ウラン弾による被ばく、原発施設周辺での被ばくなど隠され続ける悲劇が写真という手段で参加者に訴えていました。フクシマ原発による被ばくも、隠され続ける悲劇の一つになり始めていないでしょうか。

地産地消コーナーでは地酒酒造8カ所の紹介、米粉パン、有精卵、ブドウ、その他農産加工品、園芸苗など地域の方のご厚意による提供品を参加者へプレゼントしました。

夏ボラの中学生は8人の参加で、多くの体験をしてもらいました。

《2015年 8/22~23 赤磐市立中央図書館 参加者 のべ150人》

③この活動によって達成された成果

無事 17 年目を向かえました。

市と教育委員会の後援をいただき、市内の小、中学生と大人たちを対象に、無関心でいてはいけない深刻な環境問題をわかりやすく学び、知る機会を身近な地域で継続してきたことは、貴重な事業となっています。

④今後の計画・展望について

引き続き地域の事業者さんのご協力、岡山環境ネットワークからの助成金により地域で取り組みを継続させて行きます。

今年はフクシマ原発事故から 5 年を迎えます。政府は帰還困難地区の指定解除をすすめ、国からの避難者への保証金打ち切りを狙い、「無駄」な除染事業を大手業者へ税金をばらまき続けています。それに対して全国で、国や東京電力を相手取り訴訟が起きています。

一方、放射能からの保養事業が民間のボランティアが熱意で継続していますが、経済的な負担が大きく縮小を余儀なくされています。多くの課題を抱えるフクシマ原発事故から学ぶこと、そして次々と止めていた各地の原発が、再稼働を始めています。「安全神話」が暴かれたにもかかわらず、経済優先の政府の力づくのやり方を知っていただくこと、4 月からの電力自由化による原発でない電気の購入のすすめなど。小学生以下の子どもを持つ親たちを対象にした企画を検討しています。